

平成 21 年 5 月 16 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18720053

研究課題名（和文） 江戸幕府の演能データベース作成に向けた幕政史料・能楽史料の基礎的研究

研究課題名（英文） Basic study aimed at making the Database of No performing history in the Edo castle based on research after historical documents of the Tokugawa shogunate

研究代表者

大阪学院大学・国際学部・准教授 宮本圭造

研究成果の概要：

江戸時代、能は江戸幕府の式楽として武家儀礼の中に位置づけられた。一方、将軍の慰みとしての能は、武家儀礼の場から切り離され、奥能・中奥能という別の場を与えられた。江戸幕府の能に関する従来の研究は、前者の式楽としての側面に焦点を当てたものが少なくなかったが、本研究では、将軍の私的な演能も含めて、江戸幕府の能を総合的に明らかにすべく、演能データベースを構築することをめざした。そのデータ収集のため、番組帳や日記類から演能記録を抽出し、従来研究の少なかった江戸後期の将軍家斉・家慶時代の奥能・中奥能について、基礎的なデータベースを作成した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成18年度	900,000	270,000	1,170,000
平成19年度	700,000	210,000	910,000
平成20年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：能 狂言 江戸幕府 芸能史 武家儀礼

## 1. 研究開始当初の背景

室町時代に大成を見た能は、常に権力者の庇護と密接に関わりながら、その歴史を歩んできた。江戸時代になると、能は江戸幕府の式楽として武家儀礼の中に位置づけられ、念頭の謡初、公家衆饗応能、将軍宣下能など、幕府の年中行事や儀礼における公式の舞楽に欠かせぬものとなる。そうした、式楽としての幕府の能楽については、これまでも多くの研究が積み重ねられてきた。しかし、従来の研究は、個々の能役者について取り上げた

ものや、ある特定の時代に焦点を当てたものが大半であり、江戸後期の幕府における演能や将軍の御側で行われた私的な演能については、十分な研究がなされてこなかった。本研究は、そうした研究の現状を踏まえ、江戸幕府における演能の記録を出来る限り網羅的に集成し、これをデータベース化することによって、江戸幕府演能史の総合的な考察を企図したものである。

## 2. 研究の目的

江戸幕府において、能は武家の「式楽」として位置づけられた。一方で、将軍個人の慰みとしての能は、武家儀礼の場から切り離され、奥能・中奥能という別の場を与えられた。すなわち、江戸幕府の能は、大きく見て、公的な催しと私的な催しの双方から成っていたのである。従来の研究は前者の公的な演能に偏する傾向が強かったが、本研究は江戸幕府の演能史を総合的な形で把握するため、将軍の私的な演能も含め、その基礎となる能楽資料を収集し、これをデータベース化することによって、江戸幕府と能との関わりがどのように変遷していったかを明確にするのを目的としている。具体的には、江戸幕府の公日記である『柳営日次記』や酒井家本『江戸幕府日記』などから能楽関係記事を抽出し、各所に所蔵される番組資料、あるいは能役者諸家に伝えられた演出資料を集成し、データ入力を行って、演能データベースの構築をめざす。さらに、その演能データベースと演出資料とを相互に関連させることによって、能が江戸時代を通じて、どのように成長・発展したかを、具体的な資料に基づいて明らかにすることをめざす。

### 3. 研究の方法

#### (1) 資料の収集

江戸幕府演能データベースの作成のためには、まずデータの網羅的な収集が求められる。法政大学鴻山文庫と早稲田大学演劇博物館に所蔵される『触流し御能組』は、幕府の触流し方によって記録された番組帳であるが、本資料によって、享保から幕末までの表能の番組はほぼ全て把握することが出来る。近年、表章氏によって、その内容の便覧と索引が作成され、江戸幕府演能データベースに準ずるものとして活用することが可能であるが、本資料には、享保以前の番組や、将軍の周辺で行われた私的な演能についての記載がなく、同書に記載のないこれらの催しについては、他の資料を博捜して、番組の有無を確認するよりほかないのが現状である。そこで本研究では、特に『触流し御能組』に記載のない時期・催しを中心に、江戸幕府の公日記類、能役者によりまとめられた番組帳などを広く収集し、そこから江戸幕府での演能記録を抽出する作業を行った。具体的には、内閣文庫に所蔵される旧幕引継文書の中の『柳営日次記』『御日記』、酒井家本『江戸幕府日記』などの日記類を調査し、能楽関係記事を抽出する作業を行った。また、法政大学鴻山文庫に所蔵される数種の江戸後期の番組帳から、江戸城の奥能・中奥能および西丸能の番組記事を抽出し、演能データベース作成のための基礎データの収集にあたった。

これと平行して、徳川御三卿関係の能楽資

料についても網羅的な調査を実施した。法政大学鴻山文庫蔵名女川家旧蔵番組中の『清水御殿御番組』、東京国立博物館蔵『一橋徳川家御能組』、神田橋・田安家能舞台図面、国文学研究資料館蔵『田藩事実』などの資料から、江戸城での演能記録・番組に関する記録を抽出した。

#### (2) 資料のデータ入力・分析

演能データベース構築に向けて、まず『柳営日次記』の能楽関係記事のデータ入力を行った。収集された資料は膨大な数に上り、全てのデータを入力することは困難であったため、江戸後期の奥能・中奥能に範囲を限定し、データの入力を行った。この時期に範囲を限定したのは、当該期の奥能・中奥能について、これまでまとまった研究がなかったからである。同時に、徳川御三卿の一橋徳川家に関する能楽資料も順次データの入力を行い、主に江戸後期の江戸幕府における演能の特徴について、分析・考察を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 江戸幕府の能楽関係資料の概要

三年度にわたる調査により、従来研究に活用されることのなかった資料を含め、多くの江戸幕府能楽関係資料の存在が明らかになった。その主な資料の概要は以下の通りである。

#### ① 日記

『柳営日次記』(国立公文書館内閣文庫蔵)  
『御日記』(国立公文書館内閣文庫蔵)  
『江戸幕府日記』(姫路市城郭研究センター蔵)  
『江戸幕府日記』(宮内庁書陵部蔵)  
『間部日記』(国立公文書館内閣文庫蔵)  
『田藩事実』(国文学研究資料館蔵)  
『一橋家御用日記』(茨城県立博物館蔵)  
『梅若実日記』(梅若家蔵)

#### ② 番組

『触流し御能組』(法政大学鴻山文庫・早稲田大学演劇博物館蔵)  
『御内証御能組』(宮城県図書館伊達文庫蔵)  
『從寛政六年文政九年迄兩御丸御能御囃子組』(法政大学鴻山文庫蔵)  
『寛政六年とらより御本丸御能番組』(同)  
『文化五年辰三月五日より御本丸御能番組』(同)  
『御本丸大奥御番組』(同)  
『御本丸西御丸御用』(同)  
『文政・嘉永年中御奥囃子組等』(同)  
『嘉永・安政番組集』(同)  
『江府御能組』(同)  
『兩丸御能組』(同)  
『一橋徳川家御能組』(東京国立博物館蔵)

(2) 上記資料から窺われる江戸幕府の能

こうして収集された江戸幕府の能楽資料は膨大な数に上るが、これらを分析することで、江戸幕府の能楽はきわめて具体的な姿で把握することが出来るようになった。とりわけ、今回の調査で重点を置いた、江戸後期中奥能・奥能および西丸能については、これまでその様相がほとんど明らかでなかっただけに、今回作成された演能データベースが今後の研究に資するところは大きいものと思われる。

従来、徳川家歴代将軍と能との関わりは、七代将軍家継から八代吉宗の時代に大きな転機を迎えたというのが通説であった。すなわち、前代の綱吉や家宣が側用人を相手に能に耽溺し、しばしば私的な演能を催していたのを大幅に改め、「綱吉・家宣両将軍による独特の奥能体制はこの頃に廃止の方向が定められた」(『岩波講座能・狂言』)と見るのが通説だったのである。家継・吉宗の代に、幕府の演能体制が大きく見直されたのは確かであるが、しかしながら、将軍の近臣による奥能体制が江戸後期にまったく廃止されたわけではないらしい。というのも、吉宗以後の歴代将軍の周辺でも、将軍や近臣による私的な演能が盛んに行われていたことが、今回の調査で明らかになったからである。

なかでも、八代将軍吉宗の次男・四男、および九代将軍家重の次男を祖とする一橋・田安・清水の徳川家御三卿と能との関わりが、その後の江戸幕府における演能史にも大きな影響を与えていたことが判明した。御三卿は、いずれも独立した藩の形をとらず、将軍家近親として江戸城内に屋敷を構えていた。領国の経営に腐心する必要のなかった御三卿の当主は、比較的自由的な環境にあって、自ら能を嗜み、近臣による内々の能をしばしば催していたが、そのうち、田安徳川家の初代宗武は観世流の能を学び、国学への傾倒から、能の詞章改訂に深く関わったことが知られている。その田安宗武以外にも、御三卿の当主で能を愛好したものは少なくない。例えば、一橋徳川家の二代治済は、金春流の大鼓を、後に宝生流の能を学び、宝生大夫に働きかけて、それまで宝生流で上演されていなかった十二の曲目をレパートリーに加えさせるなどしている。さらに、その治済の息子の家斉が十一代将軍となったことで、一橋家の家風は将軍家にも持ち込まれ、将軍家の周辺でも近臣・御小姓を中心とする私的な演能が盛んに行われるようになった。すなわち、江戸後期の将軍周辺の演能は、多分に一橋徳川家と能との関わりに影響を受けていると考えられるのである。その様相は、今回調査を行った法政大学鴻山文庫蔵の『御本丸大奥御番組』『御本丸西御丸御用』『文政・嘉永年中御

奥囃子組等』などの番組を通じて、具体的に明らかにすることが出来たが、これらの催しでは、五座役者のみならず、将軍およびその近習らが多く出演し、将軍家斉の御台所を通じて将軍家と縁つづきにあった島津斉興らも含め、将軍を中心とする能楽サロンが形成されていた様子が窺える。

このように、幕政史料・能楽史料に基づく演能データベースを作成することで、江戸幕府の能楽史は、具体的な資料の裏づけを得て、飛躍的に進展するものと思われる。今回の研究では、資料の収集・データ入力に重きを置いたため、江戸幕府能楽史の本格的な研究にはようやく着手した段階にあるが、上記の演能データベースを拡充し、江戸幕府の演能史の基礎を構築することが今後の課題となる。

また、江戸幕府における能楽史料を収集する過程で、能の演技について記した型付のうち、具体的な上演年時を記した資料が少なからず伝存していることが判明した。これらの型付資料を演能データベースと連関させることによって、能がその時々催しでどのように上演されていたのかを具体的に把握し、それを編年化することが可能となる。こうした研究を積み重ねることにより、能の上演史研究は飛躍的に進展することが予想されるが、これについてもまた今後の課題とし、資料の収集を継続して行っていくことにしたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 20 件)

- ① 宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(十四)」、『観世』76巻2号、44～49頁、2009年、査読無
- ② 宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(十三)」、『観世』76巻1号、61～66頁、2009年、査読無
- ③ 宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(十二)」、『観世』75巻12号、42～49頁、2008年、査読無
- ④ 宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(十一)」、『観世』75巻11号、48～56頁、2008年、査読無
- ⑤ 宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(十)」、『観世』75巻10号、48～55頁、2008年、査読無
- ⑥ 宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(九)」、『観世』75巻9号、48～53頁、2008年、査読無
- ⑦ 宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(八)」、『観世』75巻8号、60～67頁、2008年、査読無

- ⑧宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(七)」、  
『観世』75巻7号、48～54頁、2008年、  
査読無
- ⑨宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(六)」、  
『観世』75巻6号、48～54頁、2008年、  
査読無
- ⑩宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(五)」、  
『観世』75巻5号、46～51頁、2008年、  
査読無
- ⑪宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(四)」、  
『観世』75巻4号、50～55頁、2008年、  
査読無
- ⑫宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(三)」、  
『観世』75巻3号、54～59頁、2008年、  
査読無
- ⑬宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(二)」、  
『観世』75巻2号、44～49頁、2008年、  
査読無
- ⑭宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記(一)」、  
『観世』75巻1号、58～63頁、2008年、  
査読無
- ⑮宮本圭造、「春日若宮おん祭と大和猿楽」、  
『能と狂言』6号、112～121頁、2008年、  
査読無
- ⑯宮本圭造、「国立能楽堂蔵「散楽并狂言之  
図」一紹介と考察一」、『国立能楽堂調査研  
究』1号、49～68頁、2007年、査読有
- ⑰宮本圭造、「江戸時代能楽繁盛記(十二)」、  
『観世』73巻12号、64～69頁、2006年、  
査読無
- ⑱宮本圭造、「江戸時代能楽繁盛記(十一)」、  
『観世』73巻11号、66～71頁、2006年、  
査読無
- ⑲宮本圭造、「江戸時代能楽繁盛記(十)」、『観  
世』73巻10号、60～66頁、2006年、査  
読無
- ⑳宮本圭造、「江戸時代能楽繁盛記(九)」、『観  
世』73巻9号、58～63頁、2006年、査読  
無

[学会発表] (計 2 件)

- ①宮本圭造、「真嶋宴庵伝追考」、能楽学会大  
会、2008年5月14日、早稲田大学
- ②宮本圭造、「藩政記録から分かること、分  
からないこと」、芸能史研究会東京例会、  
2008年12月6日、法政大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮本 圭造 (MIYAMOTO KEIZO)  
大阪学院大学・国際学部・准教授  
研究者番号 70360253

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者